A Bride in Underground-Castle

地底魔城の花嫁　４

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=21003125

ヒュンケル, マァム, ヒュンマ, ダイ, ポップ, レオナ, クロコダイン, ヒュンマCandyFes, ダイの大冒険

もし、地底魔城の闘技場で決着がつかず、ヒュンケルが不死騎団長を続けていたら、から始まる物語の第４章。本編はここで終わり。

ようやく心を通じ合わせたヒュンケルとマァムではあったが、再戦のときは迫る。
一方、パプニカ側では、ダイがレオナにある提案を持ちかける。
四者の意志が錯綜する中、ヒュンケルは、ある決断をする。

本作は、ヒュンケルが不死騎団長を継続している世界観なので、その動機付けのために、師への恨み以外の要素を加えています。しかし、もちろん、その要素は、当シリーズのみのもので、原作にはありません。

2023.11.11　ヒュンマCandyFes合わせ。

地底魔城の花嫁　4

　パプニカ軍が本拠としている砦内の会議室で、三賢者筆頭のアポロは、難しい顔をしていた。その隣に座るマリンもまた、厳しい表情を浮かべており、エイミは、戸惑った様子で、アポロ、マリンとレオナとの間を、何度も視線を往復させていた。
　アポロは、苦々し気に口を開いた。
「・・・今回の策、あまりにも危険すぎました。
　いずれにしても、もう、不死騎団には同じ手は使えません。」
　レオナは、不満げな面持ちでアポロに言い返した。
「でも、ニフラムが有効ってことはわかったわよ。」
　アポロは、そんなレオナに、理路整然と反論した。
「姫、奇襲というのは、相手がこちらの手のうちを知らないからこそ有効なのです。一度使ってしまったら、必ず相手はその対抗策を考えてきます。今後は、ニフラムを仕掛けられないように注意してくるでしょう。
　もっとも、たとえ、不死騎団に対抗策がなかったとしても、私はもう同じ策をとることには賛同いたしかねます。」
「どうしてよ。」
　レオナは憮然としてアポロに尋ねた。その声色は、レオナが事態を理解していないかのように、アポロには感じられた。アポロは、声を振り絞った。日頃から冷静な彼にしては、極めて珍しいことだった。
「姫の御身が危険だからです！
　あの男・・・不死騎団長・・・彼は人間だと聞きましたが、単騎、あの崖を駆け上がって姫に襲い掛かったあの膂力、あの剛剣・・・本当に人間なんですか。
　ダイくんがいたから何とか退けられたものの・・・そうでなかったら、姫の首は、あのとき落とされていたのですよ！！」
　ヒュンケルの狂刃を間近で目撃したレオナには、反論する余地もなかった。
　アポロは、言葉をつづけた。

「確かに、ダイくんたちの話から、魔法陣を使って、魔法の適用範囲を最大限広げるという手段は有効でした。不死騎団長は、魔法が使えないのですね。彼が魔法陣に気付いたのも、思ったよりも遅かった。それに、我々の中で、あの魔法陣と最も相性がよく、ニフラムを最大限広げられるのも、姫でした。それはその通りです。
　本来ならば、これだけの条件が揃っていたのですから、不死騎団の多くを一気に消滅させられていたはずなんです。
　あそこで、不死騎団長が、崖を上がって来なければ・・・不死騎団は、壊滅していました。
　それなのに・・・我々は、逆に、こちらの喉元に刃を突きつけられたのです。」
　アポロは呻いた。
「本当に・・・肝が冷えました。
　姫を前線に出すことはできません。
　ですが、次に打てる策は・・・。」
　アポロは、悔しげに唇を噛み、最後の言葉を飲み込んだ。
場がしん、と静まり返った。
　いったんは不死騎団を退けたものの、アポロの言うとおり、これでは勝ったうちに入らない。現状維持にしかなっていない上、次に不死騎団に攻められたときに対抗できる策が、現状、ない。
　数では、現在のパプニカ兵は不死騎団に及ばない上、食料も武器も弾薬も乏しくなっている。その上、各地からの応援も望めない。
　アポロたちが厳しい表情で沈黙する中、ダイが、控えめに声を上げた。
「あのさ・・・レオナ。頼みがあるんだけど、いいかな？」
「なに？ダイくん。どうしたの？」
　ダイは、ポップに視線を送った。ポップは、ダイが何を言おうとしているのか勘づいたようで、黙ってうなずいた。ダイも、それに応えるようにうなずく。
　ダイは、レオナに言葉を返した。
「うん・・・。ポップとも話してたんだけどさ・・・ちょっと、考えていることがあるんだ。
　それに、会ってほしいひともいる。

レオナが、よければ、なんだけど・・・。」
「ピィッ！」
　ゴールデンメタルスライムの彼も呼応した。
　レオナたちパプニカ王国の面々は、まだ幼い勇者の少年の言葉に耳を傾けた。

　マァムが目を覚ますと、すぐ目の前に男の胸板が迫っていた。
　素肌を曝したその胸元に、マァムはどきりとしたが、すぐに笑みを浮かべ、そっと腕を伸ばした。そのまま、彼の胸元に顔を埋め、その体温を肌で感じた。
　マァムが初めてヒュンケルと肌を重ねてから、夜は、彼の部屋で眠るのが日常になっていた。
　お互いに求めあう夜もあれば、そうでない日もある。
　だが、何もなくても、お互いの呼吸や体温を感じながら眠りにつくのは実に心地が良かった。そして、いつの間にか、それが当たり前になっていた。
　昨夜は、お互いを強く求め、そして疲れきって、そのまま眠ってしまったのだろう。マァムの肌のあちこちに、まだ彼の痕跡が残されていた。
　マァムは、ヒュンケルの胸に顔を埋め、その背に腕を回した。愛おしさがあふれそうになって、目の奥がつんとする。
　だが、同時に、得も言われぬ不安感が彼女の胸の奥には常に漂っていた。
　あとどれだけ、こうしていられるのだろうか。
　ヒュンケルは、少し前に、ダイと戦い、大きな傷を負った。
　このままヒュンケルが不死騎団長を続けていれば、いずれ必ず、またダイと戦うことになる。それも、その日は、そう遠くはない。
　だが、確固たる信念を持って不死騎団長として務めているヒュンケルに、安易に、魔王軍を抜けさせることもできなかった。
　次にダイとヒュンケルが戦ったら、きっと、ふたりのうちのどちらかが、あるいはふたりともが、命を落とすことになる。
　マァムは、その容易に予想できる最悪の未来に、背筋に冷たいものが走るのを感じた。それだけはあってはならない。マァムにとっ

ては、最早、ふたりとも、失いたくない存在になっていたのだ。
　マァムは、ヒュンケルの裸の肌を抱きしめながら、強く思った。
―どうしたら、この人を護れるの・・・。
　ヒュンケルと、ダイのふたりともを・・・。
　そう思いながら彼の胸に顔を埋めていると、不意に、背中に彼の手の感触を覚えた。髪にも、軽く、唇を感じる。
　マァムは顔を上げた。
　すると、ヒュンケルのダークグレーの瞳と目が合った。普段は鋭いその眼差しが、穏やかに微笑んでいる。
　マァムは、彼に呼びかけた。
「おはよう、ヒュンケル。」
「おはよう。」
　当たり前になった会話に、胸が温かくなった。
　彼は、少しの間、マァムを抱きしめていたが、やがて、名残惜しそうに手を放した。
「そろそろ起きるか。」
「うん。」
　ゆっくりと半身を起こしたが、ふたりともまだ何も身に着けていなかったので、マァムは、慌てて彼に背中を向けた。
　ヒュンケルは、苦笑して、マァムを背中から抱きしめた。
「なんだ、いまさら。
　もうお前の身体で、俺が知らないところなんてどこもないだろうに。」
　そう言って、マァムのうなじに唇を這わせた。背後から、マァムの豊かな乳房にその手が伸びる。
「やっ・・・だめっ・・・もう、朝だからっ！！」
　マァムは真っ赤になって叫んだ。
「残念だな。」
　手や唇が離れ、ヒュンケルの不満げな声が背中から聞こえた。
　マァムは、起き抜けから火をつけられそうになり、恨めし気に抗議した。
「・・・い、いじわる。」
「それもとっくに、知っているだろう？」

あっさりと返され、マァムは、悔しいが何も言い返せなかった。
　マァムが身支度を整えていると、不意に、また、背後から腕が伸びてきた。背中から抱きしめられ、マァムは、つい先ほどのことが頭をよぎった。強く抗議する。
「ヒュンケル！ダメって・・・！」
　だが、ヒュンケルは、マァムを背後から抱きしめる腕に力を込めた。ぽつりと、呟く。
「少し、こうさせてくれないか。」
　先ほどよりもずっと落ち着いた声色と、彼が、マァムの敏感な箇所には腕を伸ばそうとしていないことに気付き、マァムは力を抜いた。
　マァムは、ヒュンケルに尋ねた。
「どうかした？」
「いや・・・そういうわけじゃない。」
　そのまま、ヒュンケルはマァムを抱きしめた。水滴が落ちるように、彼は、言葉を零していった。
「不思議だな・・・。こうしているだけで、落ち着く。
　お前を抱きしめているだけで、心地いい。
　こんなふうに思ったことはなかったな・・・。」
「ヒュンケル・・・。」
「ずっと、長い間、何かが足りないような気がしていた。胸の奥に穴が開いているような。
　それが、お前をこうして抱き締めているだけで、感じなくなった。
　俺に何が欠けていたのか、ようやく解った気がする。」
　マァムは、そっと、自分を抱きしめるヒュンケルの腕に手を伸ばした。そして、もぞもぞと彼の腕の中で身じろぎをする。ヒュンケルが腕を緩めると、マァムは、くるりと体の向きを変え、振り返った。
　マァムは、ヒュンケルに向き合うと、今度は彼女の方から彼の背に腕を回した。そして、そっと、尋ねる。
「・・・落ち着く？」
「ああ。」

マァムは、ぎゅっと胸の奥がつかまれるような感覚を覚えた。なんだか泣きたくなる。
　マァムは囁いた。
「私も・・・こうしていたい。」
「マァム・・・。」
　そうしていると、控えめに、寝室のドアがノックされた。
「ヒュンケル様、起きてらっしゃいますか？」
　モルグの声だった。
　まだ下着姿のマァムは慌て、頬を赤らめた。ヒュンケルから腕を放して、布団で体を隠す。ヒュンケルは、マァムを腕の中にかばいながら、ドアの外に向かって、声を掛けた。
「何だ、モルグ。急ぎか？すぐに俺がそっちへ行く。」
「はい・・・お急ぎを。お待ちしております。」
　モルグのその言い回しに、ヒュンケルは眉をひそめた。何か起こったのだろうか。
　ヒュンケルは、立ち上がると、急いで身支度を整え、マァムに振り返った。
「行ってくる。お前はゆっくりしていて構わん。」
「うん・・・。」
　マァムも何か感じ取ったのか、不安げにヒュンケルを見上げていた。
　ヒュンケルは、マァムの頤に指を伸ばした。身をかがめ、軽く、口づけた。
　そして、すぐに、彼は、寝室を後にした。

　玉座の間で、いつもどおりの座にヒュンケルがつくと、モルグが、神妙な面持ちで、１通の手紙を差し出した。
　ヒュンケルは、不審げに眉をひそめ、手紙を裏に返した。
　封緘印は、パプニカ王家のもの、だが、署名は。
「・・・ダイか。」
「はい。
　勇者ダイからでございます。」
　ヒュンケルは、中を開け、さっと一読した。そして、口の端を上

げ、低く笑った。
「・・・こう来たか。」
「何と、おありで？」
「読んでみろ。」
　ヒュンケルは、モルグに、ダイからの手紙を渡した。
　その短い文章を読み、モルグもまた、眉をひそめた。
「・・・これは。」
「決闘の申し入れだな。」
　ヒュンケルは簡潔にまとめた。
　ダイの手紙には、こうあった。
—ヒュンケル、これ以上皆を巻き込みたくない。
　おれとポップ、ヒュンケルのアバンの使徒だけで決着をつけよう。
　おれが勝ったら、パプニカと、マァムを返してくれ。
　ごく短く、ダイの要求が書かれており、日時場所も指定されていた。
　ヒュンケルは呟いた。
「返してやるわけにはいかんな。どちらも・・・な。」
「お受けする必要はありませんぞ、ヒュンケル様。
　貴方様には当然お判りでしょうが、このような申し出をしてきたということは、パプニカ側は、最早、パプニカ軍だけでは、不死騎団に対抗できないということです。
　我らの目的はあくまで、王女レオナの首。
　ダイを倒さずとも、レオナ王女の首さえとってしまえば、パプニカ王家はそこで滅亡です。」
　ヒュンケルは、モルグの言葉に頷いた。
「そうだな。
　だが、これに俺が応じなければ、ダイは、俺が怪我をしていると確信するだろう。」
「・・・どういうことでしょうか。」
　訝しげに、モルグは尋ねた。
「ダイは、俺と戦った時に、俺に加えた一撃に手ごたえを感じたはずだ。俺がダイなら、そのくらい、解る。

もし、このダイの申し出に応じなければ、不死騎団長は怪我をしている、攻めるなら今だ、と各地に触れこむだろうな。」
　モルグは、言葉に詰まった。
「・・・それは・・・。」
「事実なだけにたちが悪い。
　受けるしかあるまい。
　幸い、俺の方は、ほぼ全快だ。
　どのみち、ダイは必ず倒さねばならん相手だ。
　ダイさえ倒してしまえば、パプニカ軍など恐れるに足らん。」
「・・・では。」
　慎重なモルグの問いかけに、ヒュンケルは頷いた。
「ああ。討って出る。
　望みどおり、応じてやろうではないか。」
　ヒュンケルは、モルグに命じた。
「モルグ、ダイに返事を出せ。望み通り、応じてやろう、ただし、俺が勝ったらレオナ王女を差し出せ、とな。」
「・・・御意。」
　モルグは、恭しく頭を下げた。
　しばし、モルグは、沈黙していたが、やがて、遠慮がちにヒュンケルに尋ねた。
「ヒュンケル様、マァム様には、このことは・・・。」
　ヒュンケルは、モルグの言葉を遮って、答えた。
「言う必要はない。
　マァムには、俺が出たことも気付かせるな。」
「はっ・・・。」
　ヒュンケルは、ダイを甘く見てはいなかった。これはぎりぎりの戦いになると肌で感じていた。ポップと二人で臨むという点も強く引っかかる。
　あのとき、ダイの一撃が鎧の魔剣を大きく破損させた。それは、ダイの力だけではなかったはずだ。
　ヒュンケルは、ダイの手紙の最後の一文を思いかえした。
　パプニカと、マァムを返してくれ。
　マァムを。

—・・・返せるものか。
　ヒュンケルは強く思った。
　だが、この戦いの後はどうなるのか。
　万が一、ヒュンケルがダイに倒されれば、マァムに会うことはかなわない。
　だが、ヒュンケルが勝ったとしたら、そのときにマァムはどうするのか。
　それでも、ヒュンケルは後戻りすることはできなかった。
　いかに彼がマァムを愛していようとも、これまで彼が掲げてきたモンスターたちの失地回復の悲願をここで諦めるわけにはいかないのだ。
—俺がダイを倒したら・・・おとうと弟子を手にかけた俺を、マァムは、許しはしないだろう。俺を、愛し続けてはくれんだろうな・・・。
　だが、マァムに恨まれ続けることになったとしても、彼女を手放すことはできそうになかった。
　いずれにしても、この戦いを機に、マァムとの今の関係は終わりを迎える。
　ヒュンケルは、そう感じていた。

　その日の終わり、いつものように、マァムは、ヒュンケルの寝室に赴いた。
　マァムは、ベッドに腰かけ、立ったままのヒュンケルを見上げた。
「ヒュンケル・・・今日、何かあった？」
「いや。何故だ？」
「だってモルグさんが、朝・・・。」
「戦況報告だ。交戦中なんだ、急ぎの報告があるのは当たり前だろう。」
　当然のように答えるヒュンケルの言葉に不自然な点はなかった。だが、マァムは引き下がらない。
「本当に？」
「何故疑う。」

「モルグさんにも、何度も聞いたんだけど、答えてくれなくて・・・。だから、私に言えないようなことがあったのかなって・・・。」
「軍事的なことをモルグがお前に言えないのは、当たり前だろう。」
「じゃあ、ヒュンケルは？」
　そう言って、マァムはじっとヒュンケルを見上げた。
「貴方はこの不死騎団の責任者なんだから、私に言う言わないは、貴方自身で判断できるでしょう？この前の出撃のことだって、私を鬼岩城にまで連れて行って、目の前で話してたんだから、隠してたわけじゃないでしょうし。」
「・・・お前は、頭がいいな。」
　ヒュンケルは苦笑した。どうも、マァムを相手に、はぐらかすのは無理があったようだ。
　だが、それでも、ダイの手紙のことを言うわけにはいかなかった。
　マァムは、ヒュンケルの前で頬を膨らませた。
「ヒュンケル、ごまかさないでよ。」
「わかった、わかった。
　なら、俺から１つ頼んでいいか？」
　急な申し出に、マァムは身構えた。ヒュンケルの言葉の予想がつかなかったのだ。
「な、なに？」
　だが、ヒュンケルは、マァムの横に腰を下ろすと、彼女を真っすぐに見つめた。
「お前といるときだけは、戦いのことは忘れさせてほしい。」
　それは、掛値ないヒュンケルの本心だった。
　ダイと戦うこと。そして、その果てに待ち受けるもの。
　いまはどちらも考えずにいたかった。
　だが、同時に、マァムは質問を封じられた。マァムは口ごもった。
「・・・それは。」
「だめか？」

その瞳に、懇願するような色が宿る。普段は見せない、ほんの少しだけ少年のような表情に、マァムは、やはり少しだけ悔しげにつぶやいた。
「ずるい・・・。」
ヒュンケルは、マァムの頬に手を伸ばした。
「マァム、お前のことだけを考えさせてくれ。」
そして、ヒュンケルは、マァムに口づけると、そのまま、彼女をベッドの上に倒した。

その夜、マァムは、かつてないくらい激しく、強く、彼に求められた。

ヒュンケルは、汗でマァムの額に張り付いた彼女の前髪を手で払った。額が露わになると、少し幼さが感じられる。
マァムは、ヒュンケルの腕の中で、気を失ったように眠っていた。さすがに、無理をさせすぎた。もう無理だというマァムの懇願を退け、強引に彼女を求め続けた。
いまは、マァムは、ヒュンケルの腕に頭を乗せ、深い眠りについていた。
マァムの隣で裸体のまま横たわり、彼女の寝顔を見つめていたヒュンケルは、愛おしさと申し訳なさが同居したかのような、切なげな眼差しをしていた。
愛おしさが抑えられず、彼は、頻繁にマァムを求めてしまっていた。だが、この行為の続く果てに何が待ち受けているのか、わからない彼ではない。
いや、マァムの方が、より強く、それを感じているのだろう。
彼は、初めてマァムと契りを交わしたときのことを思い出していた。
—もし、そうなったら、私の命も、貴方の命も、自分たちだけのものではなくなるわ。
責任ができるもの。
彼女はそう言った。
その責任の意味は、もちろん、ヒュンケルも理解していた。

―だから、ヒュンケル。生きて帰って。
　まっすぐにヒュンケルを見上げ、マァムは願った。
　だが、それに、彼は答えることはできなかった。
　ヒュンケルは、幼いころから戦場に生きてきた。だから彼はよく知っていた。どんなに勝ち目のある戦いであったとしても、命の危険は常にあるのだということを。
　あの日、マァムに言った言葉と同じ言葉を、ヒュンケルは呟いた。眠るマァムに呼びかける。
「最善は尽くす。」
　その彼の眼差しが、寂しげに揺らいだ。
「だが、生きて帰ったとして・・・その俺を、お前は迎えてくれるのか・・・？」
　ヒュンケルの呟きは、夜闇に紛れて消えていった。

　ダイが指定してきた場所は、意外なことに、地底魔城にほど近い平原であった。さすがに、パプニカ軍がニフラムを大々的に仕掛けた地点付近では、ヒュンケルが警戒して応じないと考えたのだろう。
　ダイが、ヒュンケルと戦うために選んだその平原に、ヒュンケルは、わずかな不死騎団員を伴って赴いた。すでに鎧の魔剣で武装しており、ヒュンケルの全身を覆う魔剣が、陽光に当たり、銀色に輝いていた。
　だが、頭まで鎧に身を包んでいる分だけ、ヒュンケルの表情はうかがい知れなかった。
　対するダイは、ポップを連れていたが、その場には、意外な人物の姿もあった。
　約束どおりに現れたヒュンケルに、ダイは尋ねた。
「もう、傷は大丈夫なの？ヒュンケル。」
　ヒュンケルは、ぴくりと眉を潜め、嘯いた。
「なんのことだ。」
　食って掛かったのは、ダイではなく、ポップだった。
「しらばっくれてんじゃねえよ。この前のダイの一撃、決まったんだろうが。大怪我したんじゃねえのかよ！」

だが、ヒュンケルは、動じることなく答えた。
「知らんな。
　今の俺は、全快だ。何の問題もない。」
　すると、ダイが笑みを浮かべた。
「それならよかった。」
「ダイ？」
　意外な言葉に、ポップが驚く。
　ダイは言葉をつづけた。
「この前のせいで、全力でヒュンケルが戦えないのなら、何か、ずるいことしちゃったなって思ったから。こっちはふたりだしね。」
　幼い勇者の言い分に、ヒュンケルは失笑で応えた。
「生意気な口を叩くな。ふたりでも何ら問題ないと思ったから応じたまでのこと。
　それよりも、約束は守ってもらうぞ。
　俺が勝ったら、レオナ王女を引き渡せ。」
　その言葉に、ダイは表情を引き締めた。その面に、さっと緊張が走る。
「・・・分かっている。」
　ヒュンケルの物言いにポップが反論した。
「てめえこそ、そっちが負けたら、パプニカとマァムを返すって約束は守るんだろうな！
　マァムはどうした！連れてきてねえのかよ！」
　ポップの詰問に、ヒュンケルは、不敵な笑みで答えた。
「置いてきた。地底魔城にいる。
　いくら元とはいえ、かつての仲間のむごたらしい姿を、我が妻に見せるのは忍びなくてな。」
「・・・なんだとぉ。」
「この戦いが終わったら、迎えに行ってやるといい。俺が倒れれば、不死騎団の者たちも、お前たちには危害を加えないはずだ。
　もっとも、そんなことは起こるはずがないがな。」
「てめえ・・・。」
　怒りのみなぎった眼差しで、ポップはヒュンケルを見据えた。
　だが、ヒュンケルは、ポップの視線を無視し、この場に現れたも

うひとりの人物に、言葉をかけた。
「お前もダイに加勢するつもりか、クロコダイン。」
　クロコダインは答えた。
「俺はただの見分役だ。
　お前とダイが戦うというのだからな。」
「いざとなったらダイを救助するつもりなのだろう。見分が聞いて呆れる。」
「それはお前に対しても同じだ、ヒュンケル。命まで取り合う必要はあるまい。」
「俺がこの小僧に敗れるとでも言いたいのか？お前の意向など関係ない。俺の好きにさせてもらう。」
　ヒュンケルは、そうクロコダインに言い放つと、ダイに向き直った。
　そして、彼は、ダイの背後に向かって、声を張り上げた。
「パプニカ王国の者たちよ！この場に隠れているのであろう！？
　聞いたとおりだ！俺が勝ったら、レオナ王女の身柄をもらい受ける！
　せいぜいそこで、お前たちが縋った勇者の最期を見届けるがいい！」
　ヒュンケルの口上を聞きながら、ポップは憤懣やるかたない様子で吐き捨てた。
「んにゃろー勝手なこと言いやがって！」
　だが、ダイは冷静に答えた。
「いいんだ、ポップ。俺たちが勝てば済むことだ。俺だって、レオナを渡すわけにはいかない。
　それにマァムだって・・・。」
「そうだな。」
　ヒュンケルから視線を外さずに、緊張した面持ちで言葉を紡ぐ親友に、ポップもうなずいた。
「密談は済んだか。
　いくぞ、ダイ！！」
　叫ぶとともに、ヒュンケルは、兜に装備されていた魔剣を抜き放った。ヒュンケルの手の中で、魔剣が本来の姿に戻る。ダイと

ポップは、身構えた。
　魔剣が陽光にきらめき、銀色の輝きを見せる。
「覚悟っ！！」
　次の瞬間、魔剣を手にしたヒュンケルが大地を蹴って飛び掛かってきた。
　その剣の先にいたのは。
「お、俺っ！？」
「ポップ！！」
　ダイは叫んだ。ポップは、寸でのところでヒュンケルの切っ先を交わした。慌てて、ダイがポップの前に躍り出る。ヒュンケルの魔剣が、割って入ったダイの頭上に振り下ろされ、剣戟の音が響いた。
　ポップは、直ちにヒュンケルの間合いの外に後退り、そこから魔法を詠唱した。
「ギラっ！！」
　ヒュンケルは、右手で持った魔剣でダイの剣を受け止めながら、左手でギラの閃光を振り払った。ポップのギラが、ヒュンケルの鎧の魔剣の小手に当たり、霧散した。
　ヒュンケルは、強引にダイを振り払うと、またポップめがけて走った。魔剣を振り下ろす。ポップもまた、ヒュンケルの狂刃から逃げ、必死で間合いを取ろうとする。
　魔法使いにしては身のこなしの軽いポップであったが、ヒュンケルの攻撃をよけながらの呪文の詠唱は、さすがに厳しい。
　ふと、動作が遅れたところで、ヒュンケルの声が響いた。
「闘魔傀儡掌！」
　ヒュンケルの左手から暗黒闘気が放たれる。毒蛇のようにざあっと走るその暗い闘気は、瞬く間にポップにまとわりつき、その自由を奪った。
　ポップはもがいたが、動けない。
「し、しまった・・・！」
「ポップ！！」
　ダイが割って入り、ヒュンケルからポップへと伸びる暗黒闘気の束を断ち切る。

「逃がすかぁっ！！」
　だが、さらにヒュンケルの闘魔傀儡掌がダイとポップに襲い掛かる。ダイはそれを剣で振り払い、ポップとともに後退った。
　いったん下がったポップは、ちらりと隣のダイに視線を送った。ダイもそれに気付く。
　ふたりは、視線を交錯させると、今度は、同時にヒュンケルに向かってとびかかった。ポップが呪文を唱え、ダイがヒュンケルに剣戟を叩き込む。
「とっておきの・・・メラゾーマだっ！！」
「海波斬！！」
　その瞬間、ヒュンケルが、彼らに向かってきた。ダイと同時に地面を蹴る。
　思いがけない行動に、ダイはわずか一瞬、攻撃が遅れた。
　いち早くメラゾーマの炎がヒュンケルの鎧の魔剣にぶつかり、高い金属音を立て、ダイの海波斬は、ヒュンケルの魔剣に受け止められる。
　ダイの剣を受け止めながら、ヒュンケルは呟いた。
「やはりな。」
　ぞくりと悪寒を感じ、ダイは飛びのいた。
—気付かれた・・・？
　ダイが引くと、さらにヒュンケルは、ポップに向かって剣を振り下ろそうとした。
「ポップ！！」
「あっぶねえっ！」
　何とか、かわす。ポップは、必死にヒュンケルと距離をとった。ダイもポップをかばって前に出る。
　ダイの背後でポップがつぶやいた。
「ちっきしょー、タイミング取りずれえ。なんで俺ばっかり狙うんだよ。」
「・・・気づいている。」
　ダイは呟いた。
　いったんふたりと距離をとったヒュンケルは、真っすぐに二人を見据えていた。

ヒュンケルは、ふたりに呼びかけた。
「お前たちの狙いはわかっている。魔法と剣、それを同時にぶつけようというのだろう。」
「・・・！」
狙いをズバリ指摘され、ダイは息を飲んだ。
ヒュンケルは言葉をつづけた。
「ダイ、お前ひとりの力では俺の鎧の魔剣を砕くことはできない。しかし、この鎧の魔剣は、魔法は効かない。だから、お前たちは、魔法と同時に当てることを狙っているのだろう？鎧の魔剣を破壊し、俺にダメージを与えるために。
魔法の速度に追いつくために、海波斬を使っているのが、何よりの証拠だ。
お前たちの浅知恵に気付かぬと思うか！」
見下すようなヒュンケルの発言に、ダイは悔し気に唇を噛んだ。だが、むしろポップは、口の端を上げ、挑発的な笑みを浮かべた。
「・・・へえ、ってことは、この前のダイの攻撃、やっぱ効いてたんだな。」
「ポップ！」
ヒュンケルは、ぴくりと眉を潜めた。
ポップは、幾分か頬を引きつらせながらも、それでも、ヒュンケルを睨み据えていた。
「この前、偶然だけど、俺のメラゾーマとダイの海波斬が同時に当たったはずだ。で、てめえは引いたな、ヒュンケル。
あの攻撃が無効だったんなら、いまのてめえはこんなに警戒しないはずだ。そんな言い方もしねえはずだ。そうだろう？不死騎団長さんよ！」
ヒュンケルは何も答えなかった。
ポップは、それを肯定だと受け取った。ポップはダイを鼓舞した。
「ダイ、やっぱお前の考えは間違っちゃいねえよ！あとはやるだけだ！」
だが、ヒュンケルは、落ち着いた声色のまま、呟いた。
「小物だと思っていたが、貴様もアバンの弟子だということか。

だが、そのひけらかしが貴様の身を亡ぼすことになるぞ。」
「やれるもんならやってみろよ！
　ダイ、下がれ！」
　ポップは、ダイに向かって叫ぶと、自身も飛びずさった。ヒュンケルと大きく距離をとる。
　ダイとともに、ヒュンケルと間合いを取りながら、ポップはダイに耳打ちした。
「ダイ、いったん手を変えるぞ。少しでもあいつにダメージを与えねえと、当てるもんも当てられねえ。」
　ポップの考えを察したダイは、うなずいた。
「ダイ、少し時間、稼いでくれよ。」
「わかった。」
　そういうと、ダイはまたヒュンケルに向かっていった。ヒュンケルに向かい、剣を振り下ろす。ヒュンケルもまた、ダイの剣を受け止め、激しい剣戟の音が続いていった。
　ふたりの剣が交錯するなか、ポップの呪文を詠唱する声が響いた。
「ラナリオーン！」
　瞬く間にあたりに雨雲が呼び寄せられ、天上が厚い雲に覆われた。
　ダイは、雨雲が召喚されたことに気付くと、ヒュンケルから飛びずさり、距離をとった。すぐさま、呪文を詠唱する。
「ライデイーン！！」
　だが、ヒュンケルは、何を思ったのか、それと同時に、魔剣を虚空に放り投げた。
　ダイの呼んだ電撃が、魔剣に引き寄せられ、直撃する。
　バチっと火花の飛び散る音がした。
　ライデインの電撃を浴びた魔剣は、がらんと、大きな音を立て、地面に落ちた。
「あ・・・。」
　ダイは呆然とした。ライデインの電撃が、ヒュンケルに落ちる前に、彼の放り投げた魔剣に当たり吸収されてしまったのだ。
　ヒュンケルは、悠然と歩み寄り、大地に落ちた魔剣を拾い上げ

た。魔剣は、まだ雷を帯びており、ヒュンケルの手に痛みが走った。彼は、不快げな顔をすると、剣を大きく振り、電撃を払った。
　ヒュンケルは、ダイに視線を移した。
「お前たちがライデインを使ってくることは、この前の闘技場で分かっている。雨雲を呼ばなければライデインが使えないのが致命的だったな。」
　ダイが悔し気に唇を噛むと、ポップがダイに向かって叫んだ。
「気にすんじゃねえ、ダイ！こっから先は、俺が雨雲を維持する。撃てるタイミングでライデインを撃てっ！」
「わかった！」
　ダイに余裕が戻ったが、直ちにヒュンケルが飛び掛かる。
「させるか！」
　ダイは、ヒュンケルの魔剣を己の剣で受け止めた。
　ダイが引こうとしても、今度はヒュンケルが間合いを詰める。ライデインを撃つ隙を与えようとしていないことは明らかだった。
　ダイは、ヒュンケルの攻撃を受けながら、反撃のタイミングをうかがっていた。

　目の前で繰り広げられる、ヒュンケルと、ダイ、ポップの戦いを目に映しながら、クロコダインは胸の内でつぶやいた。
—見事なものだな・・・。
　クロコダインは、３人の男たちすべてに賞賛を覚えていた。
　ヒュンケルとは、ともに軍団長として過ごしてきた時間があり、彼の特技はよく知っていた。ヒュンケルは、その剛剣に目がいきやすいが、彼の最大の強みはそこではなかった。
　ヒュンケルの持つ最大の武器、それは戦況分析力だ。
　未知の攻撃に対しても、すぐさまそれを理解し、分析したうえで、対応をする。その回転の速さは、魔界の戦士の中でもずば抜けていた。
　不死騎団を率いて戦うときも、ヒュンケル自身が戦士として戦うときも、同様であった。
　ダイとポップの同時攻撃を阻むために、あえて、体力の低い魔法使いであるポップを狙ったことも、ライデインを、魔剣を避雷針と

してかわしたことも、彼の戦況分析力によるものだろう。
—いまはヒュンケルが押しているように見えるが、ダイもポップもこのままでは終わるまい。
　クロコダインは、ふたりに視線を送った。
　ポップもまた、戦略に長けている。ヒュンケルの言葉の断片から、その意図を探り、相手の状況に合わせて攻撃手段を変えてきている。
　そして、ダイ。
　ダイは、真っすぐにヒュンケルを見据えていた。
　クロコダインは思った。
—ダイの持つ強さは、その未知の力にもあるが、ダイはゆるぎなく己を信じている。仲間を信じぬいている。
　その自信は、ぶれない剣を作り上げる。
　それがどこまでヒュンケルに通用するか、やってみてくれ。
　ダイ、お前の力でヒュンケルを止めて見せろ。
　クロコダインはそう思いながら、彼らの戦いを見守っていた。

　ヒュンケルとダイ、ポップの戦いが繰り広げられている平原にほど近い岩陰に、レオナや三賢者、バダックが身を潜めていた。
　バダックは、心配そうな面持ちで、ダイたちを見守っていた。
「ダイくん・・・ポップくん・・・頼んだぞ・・・姫の御身がかかっておるんじゃからの・・・。」
　アポロは神妙な顔つきをし、マリン、エイミも不安げだった。
　マリンがアポロに呼びかけた。
「いくら相手に応じさせるためとはいえ、やはり負けたら姫を引き渡すという条件は無謀だったんじゃないかしら。」
「そのときは、また別の手を打つ。」
　アポロが厳しい面持ちのまま答えた。
　だが、レオナは、迷いのない目でダイを見つめていた。彼女の肩にとまった翼を持つ金のスライムをそっと撫でながら、呟いた。
「大丈夫よ。
　ダイくんは負けないわ。」
「姫。」

「それにね、私もダイくんから聞いている。
　ダイくんの本当の目的は、別にあるのよ。」
　そのまま、レオナはまっすぐに、目をそらさずにダイを見つめていた。
「ダイくんは、きっと勝つわ。
　ねっ、ゴメちゃん。」
「ピィッ！」
　まるで、未来を見通す預言者であるかのように、レオナはきっぱりとそう言った。

　ダイは、ヒュンケルの剣を受け止めながら、反撃の機会をうかがっていた。
　ダイとポップの狙いは間違ってなかった。
　魔法と剣と、その両方で同時に攻撃出来れば、鎧の魔剣を身に纏ったヒュンケルにも攻撃が通じる。
　ライデインも、鎧を通して中のヒュンケルにダメージを与えることは、以前の闘技場で実証済みだ。
　だからこそ、ヒュンケルは、ライデインもかわそうとし、そして、ポップを執拗に狙って、ふたりに同時に攻撃させないようにしていたのだ。
　だが、どうしたら、その攻撃がヒュンケルに当てられるのか。
　ダイは、必死で思考を巡らせていた。
—ポップの魔法が届く射程にヒュンケルを入れたら、またポップが狙われる。
　どうしたら、おれひとりでも、ヒュンケルに魔法と剣を両方当てられるんだ。
　そのとき、ふと、ダイの脳裏に、先ほどライデインの雷を帯びたヒュンケルの魔剣がよぎった。
—・・・待てよ。
　もしかしたら・・・。
　考えながら、ダイは、ヒュンケルに一撃を振り下ろした。だが、ヒュンケルはそれも受け止め、流す。その隙に、ダイが下がった。
　ダイは叫んだ。

「ポップ！！」
　ダイは、ポップに振り返らずに声を上げた。
「ギラだ！こっちにギラを撃ってくれ！」
　ポップは面食らった。
　いまは、ダイとヒュンケルは少し離れており、ダイの位置までは辛うじてギラは届くが、ヒュンケルの位置は射程外だ。
「ダイ！この位置じゃ、届かねえぞ！」
「おれには届くだろ？早くっ！！」
「わ、わかった。
　ギラっ！！」
　ダイの意図はわからなかったが、ポップは言われたとおりにギラの閃光を放った。
　ダイは、振り返らずに、迫りくるポップのギラに己の剣を突きだした。
「なっ・・・！」
　ヒュンケルは、息を飲んだ。
　ダイの剣が、ギラの閃光を帯び、熱を持つ。ダイの手元にまでギラの閃光が伝わり、ダイは、痛みに顔をしかめた。
　だが、ダイは、ヒュンケルに向き直ると、ギラの閃光をまとった剣を振りかぶった。
「これなら、どうだぁっ！！」
　ヒュンケルは、とっさに、鎧に覆われた自身の左腕を頭上にあげ、己をかばった。左腕で、ダイの剣を受け止める。
　ずしりとしたダメージとともに、ぱぁん、と鎧の砕ける音がした。
　ヒュンケルは顔色を変えた。
―・・・これは・・・。
　魔法剣・・・だとっ！？
　魔法を帯びた剣での攻撃。そんなものは、戦いが繰り広げられる魔界にあっても見たことがない。本来であれば、電撃系以外のすべての呪文を受け付けないはずの鎧の魔剣が悲鳴を上げた。
「やったっ！」
　ポップが歓声を上げた。

ダイの閃光を帯びた剣が、ヒュンケルに襲い掛かる。ヒュンケルは、鎧の魔剣で受け止めた。ヒュンケルは顔をしかめた。
—魔法を伴っているせいか・・・攻撃が格段に重い。
ヒュンケルは、忌々し気に舌打ちし、ダイの攻撃を振り払った。その手に、びりびりと衝撃が残り、熱の残渣がある。
ヒュンケルは、魔剣を握る右手に目を落とした。右手に衝撃が残れば、その分、剣の握りが弱くなる。
その一瞬の隙をついてダイの剣戟が、ヒュンケルの頭部を狙って走る。ヒュンケルは、わずかな差でそれを躱したが、魔法剣が彼の兜に剣閃を走らせた。
兜が割れ、がらん、と大きな音を立てて地に落ちた。
「くっ・・・！」
ヒュンケルは、己の腕で、露わになった面をかばい、いったん引いた。
ダイは、真横に剣を構えたまま、ヒュンケルを見据えた。
「これで、どうだ！
もう鎧の魔剣の防御は通じないぞ。」
「調子に乗るなぁっ！」
怒りに満ちたヒュンケルの眼差しがダイを捕らえた。

目の前の光景に、アポロは息を飲んだ。我知らず、呟く。
「・・・人間？」
ダイに兜を割られ、その素顔を曝した不死騎団長は、若い人間の男の姿をしていた。
いままで、パプニカ軍にとって「不死騎団長ヒュンケル」とは、全身に鎧をまとった素顔の見えない男であり、アンデッドモンスターたちを従える得体のしれない男だった。人間であるとのうわさを聞いたことはあったが、その実感は全くなかった。
だが、アポロの目に映る光景の中で、ダイと剣を交える不死騎団長の面は、明らかに人間の男のものだった。
「本当に、人間だったのね・・・。」
マリンも呟く。
だが、レオナの声に驚愕の色はなかった。

「ダイくんたちが言ってたじゃない。不死騎団長は、人間で、アバン先生の弟子だって。」
「ですが・・・本当にそうなのかと、思っておりました・・・。」
　アポロの声には、戸惑いの色があった。
「でも、だとしたら。」
　エイミの声が響く。
「彼はどうして、魔王軍についているのでしょう？」
　その問いに答えられる者は、誰もいなかった。

　ヒュンケルは、果敢にダイに向かっていった。ダイの魔法剣を魔剣で受け止め続け、また、小手や兜も破壊されているにも関わらず、まるでダメージを受けていないかのような剛剣をダイに向かって振り下ろしてきた。
　絶え間なく繰り出される攻撃に、ダイの息が上がってきた。
　その隙に、ヒュンケルの剣が、ダイを襲う。剣で受け止め損ね、ダイの腕から血しぶきが飛んだ。
「ダイっ！！」
　たまりかねてポップが駆け寄ろうとした。
　その気配を察し、ヒュンケルが叫んだ。
「闘魔傀儡掌！」
　暗黒闘気の波が、ポップを襲う。
「ダメだ、ポップ！！」
　ダイがポップの前に飛び出した。代わりに、ダイが暗黒闘気にからめとられた。
　自由を奪われたダイは、暗黒闘気を振り払おうともがく。だが、自力で振り払えない。
　ポップの悲鳴が響いた。
「ダイ！！」
　呼吸さえも苦しい中、ダイは、苦痛に顔を歪め、だが、それでも、懸命に一つの力ある言葉を口にした。
「ラ・・・ライデインー！」
　ダイの呼んだ雷が、詠唱者に向かって落ちていく。その電撃の刃が、ヒュンケルの暗黒闘気を断ち切った。ダイの剣が、雷槌を帯び

る。
「なにっ！？」
　ヒュンケルは焦りを覚えた。ダイが完全に自由になるより早く、彼の息の根を止めなければ。ダイに向かって、魔剣を構える。
　ヒュンケルの怒声が響いた。
「これで終わりにしてやる！
　ブラッディ―スクライド！！」
　ヒュンケルの必殺の一撃がダイに向かって走る。
　だが、ダイはよけなかった。
　ダイは、逆手に持った剣を背に回し、必殺の一撃を繰り出した。
「アバン・・・ストラッシュ！！」
　轟音とともに、ライデインの電撃を帯びたダイの剣がヒュンケルに襲い掛かる。
　ライデインストラッシュの剣戟が、ブラッディースクライドの威力を押し返し、それでもなお止まらない。
　ヒュンケルは目を見開いた。
　よけられない。
「うわあああっ！！」
　ライデインストラッシュの雷が、その剣の威力が、そのままヒュンケルの全身に叩き込まれた。
　正面からの一撃を受け、ヒュンケルは背後に吹き飛ばされた。
　鎧の魔剣が砕け、どさりと、ヒュンケルの身体が地に落ちる。
「う・・・。」
　うめき声を上げて昏倒したヒュンケルを前に、ポップは叫んだ。
「や・・・やった・・・。
　やったー！！」
「そこまでだ！」
　クロコダインの声が響く。
「もういいだろう。
　ダイ、お前の勝ちだ。」
「待て・・・。」
　クロコダインの言葉を制したのは、ヒュンケル自身だった。
　いったん倒れたものの、彼はまたすぐに肘をつき、身を起こそう

としていた。
「ヒュンケル。」
「まだ動けんのかよ！」
　クロコダインがヒュンケルを見やり、ポップは震える声で叫んだ。ダイは肩で息をしており、ヒュンケルを注視していた。
　ヒュンケルは苦しげな声で、だが、まだ闘志を失ってはいなかった。
「まだ終わっていない・・・俺は、まだ、戦える・・・。」
「もうよせ。まともにライデインとアバンストラッシュを受けたのだ。いくらお前でも、立ち上がるのも辛いはずだ。」
「・・・こんなところで負けられるか・・・！俺は、負けるわけにはいかないんだ！！あいつらのためにも・・・！」
　辛うじて、膝をついてヒュンケルは、立ち上がろうとした。そして、力のない手で、懸命に魔剣に手を伸ばす。
　だが、それにいち早く気づいたポップが走った。間に合わないと気付くや、ポップは素早く呪文を詠唱した。
「ギラっ！」
　ポップのギラが、魔剣に落ちる。
　魔剣は、ギラの閃光を受けて大きく跳ね、ヒュンケルの手が届かない向こうに落ちた。
　ヒュンケルは顔色を変えた。
　その彼に向かって、ダイが歩み寄った。まだその手には、剣が握られていた。
　ダイは、寂しげにつぶやいた。
「本当は、こんなことしたくないんだけど・・・。」
　そう言って幼い勇者は、手にした剣の切っ先をヒュンケルの喉元に向けた。ヒュンケルの背筋に冷たい汗が流れ落ちる。ヒュンケルはごくりと息を飲んだ。
―・・・ここまでか。
　そのときだった。
　ヒュンケルは、この場にいないはずの者の声を聴いた。
「待って、ダイっ！！」
　背後から聞こえたその耳に馴染む声に、ヒュンケルは振り返っ

た。ダイも、ポップも同じ方向を見る。
　ヒュンケルは呆然とした面持ちでつぶやいた。
「・・・マァム？」
　地底魔城にいるはずのマァムが、そこにはいた。彼女の背後に、モルグの姿も見える。
　マァムは、ヒュンケルに駆け寄った。
「ダイ！もうやめて！
　お願い、ヒュンケルの話を聞いて！」
「・・・マァム。」
　マァムは、膝をついたヒュンケルに駆け寄り、彼を支えようとした。
　ヒュンケルの隣で膝を折り、彼に手を伸ばしたマァムに対し、ヒュンケルは、彼女にしか聞こえない声で尋ねた。
「何故、来た。地底魔城にいたはずじゃなかったのか。」
「貴方こそ、こんな大事なこと、どうして隠していたの。」
　そう言って、彼の腕に触れたマァムの掌に、ヒュンケルは回復魔法の波動を感じた。だが、彼は、それを厳しい声でたしなめた。
「やめろ。回復魔法は使うな。」
　マァムは戸惑った目でヒュンケルを見上げた。
「どうして・・・。」
「見ていればわかる。」
　それ以上、ヒュンケルは説明しようとはしなかった。
　マァムは、再びダイに視線を向けた。声を張り上げる。
「ダイ！お願い！これ以上の戦いは止めて！！
　ヒュンケルの話を聞いてほしいの！」
　その懇願するような切実な声色に、ポップは愕然とした。彼の知っているマァムの態度ではなかった。
　ポップは、呆然とした面持ちのまま、マァムに問いただした。
「な・・・何でだよ・・・何で、そいつをかばうんだよ！！
　そいつは、お前を捕らえて、無理矢理、花嫁だとかぬかしやがったんじゃねえのかよ！！」
「そのとおりだ。」
　ポップの声に応えたのはヒュンケル自身だった。

ポップは、驚愕に目を見開いた。ヒュンケルは、淡々と言葉をつづけた。
「ポップ、だったな。お前の言うとおりだ。
　・・・この女は、俺がお前たちアバンの使徒を手中に収めたことを内外に明らかにするために、俺が無理矢理、かたち上、妻にした。お前たち人間の団結に揺さぶりをかけるためにな。
　だが、こうなってはもう、それも無意味だ。」
　ヒュンケルは、マァムに告げた。
「もういい。お前は、お前の仲間の元に帰れ。」
「・・・！ヒュンケル・・・どうして・・・。」
　マァムは悲痛な声で叫んだ。
　ダイは、ヒュンケルに向けていた剣を無言で鞘に納めた。その行動に、ヒュンケルは、いぶかしげに眉を潜めた。
「・・・どういうつもりだ。」
　ダイは、膝をついたままのヒュンケルを見つめながら、彼に応えた。
「おれは、ヒュンケルを斬るつもりは、初めからなかったよ。ヒュンケルとおれたちだけで戦わせてほしいって、おれがレオナに頼んだのは、ヒュンケルと話したかったからなんだ。」
「・・・話す？」
　不審げな面を隠そうともしないヒュンケルに、ダイは真摯な眼差しを注いだ。
「ヒュンケル、教えてほしいんだ。
　ヒュンケルは、何のために、誰のために戦っているの？」
　だが、それにヒュンケルは冷笑で応えた。
「・・・そんなもの、最初に答えただろうが。」
　しかし、ダイもそれでは納得しない。
「アバン先生を倒すためって、言ってたよね。
　でも、それだけじゃないでしょ。」
「何故そう思う。」
「だって、なんでこの前、ひとりで向かってきたの。ニフラムをかけられたときに。不死騎団の皆に退却を指示しておきながら、ヒュンケルは向かってきたじゃないか。」

「ニフラムが効かないのは、不死騎団では、俺一人だ。
　戦略上、当然だろう。」
　ヒュンケルの言葉はにべもない。だが、ダイも、そんな表面的な言葉だけでは引き下がらなかった。
　ダイは、再度、ヒュンケルに尋ねた。ダイの脳裏には、崖下の不死騎団の者たちに対し、必死で退却を指示していたヒュンケルの姿が、はっきりと蘇っていた。
「退却だけすればよかったのに、ひとりで向かってきた。
　おれにはね、ヒュンケルが不死騎団のみんなをかばったように見えたんだよ。
　それに、さっき、負けるわけにはいかないって言ったよね。あいつらのためにもって。
　ヒュンケルは、自分のためだけに戦っているんじゃないよね。」
　その問いかけに、ヒュンケルは視線を下げた。少し前に、似たような会話をしたときのことをヒュンケルは思い返していた。
「・・・お前も、マァムと同じことを聞くのだな。」
「あ・・・。」
　マァムは口元に手をやった。彼女もまた、いつかそんな会話をヒュンケルと交わしたことを思い出していた。
　ヒュンケルは、ダイから視線を外し、しばし考えこむような様子を見せた。だが、やがて、彼は、ゆっくりと立ち上がった。
　まだ全身が痛むのだろう。利き腕をかばい、苦痛に顔を歪めながらも、彼はなんとか立ち上がった。
　マァムも立ち上がって彼を支えようとしたが、ヒュンケルはマァムに手のひらを向けて、それを拒否した。
　彼は、ひとりでダイに向き合った。ひとりで立つ必要があったのだ。ダイもまた、ヒュンケルから視線をそらさず見つめる。
　ダイの眼差しを受けながら、ヒュンケルは、語り始めた。その声色からは、先ほどまでの冷笑も蔑視も消えていた。
「俺が、地底魔城のモンスターたちに育てられたことは、前にも話したな。」
「うん。」
「俺が戦うのは・・・どうしても欲しかったものは・・・モンス

ターたちが生きる場所だ。」
　ヒュンケルの語る言葉の意味が理解できず、ポップは上ずった声で尋ねた。いつの間にか、ポップもダイの近くに寄り添っていた。
「・・・どういうことだよ。」
　ヒュンケルは、順を追って話し始めた。
　ひとこと、ひとこと。言葉を選び、慎重に紡がれていくそれは、ヒュンケル自身の生きてきた軌跡だった。
「もともと、俺が地底魔城にいた頃は、モンスターたちは地上と地底魔城を行き来していた。お前たち幼い者はわからないかもしれないが、アバンがハドラーを倒すまでは、多くのモンスターたちが地上で、当たり前のように生活をしていた。
　だが、それが、あの戦いで一変した。」
　ヒュンケルはいったん言葉を区切った。
　彼はきつく唇を結んでおり、その面には、苦々し気な色がはっきりと上っていた。
「モンスターたちは、ハドラーが倒された後、魔王の庇護を失った。そのモンスターたちを、人間たちは追い立てた。モンスターたちを彼らが暮らしていた地域から追い出し、迫害した。
　いまは、お前たちが目にしているとおり、モンスターたちは、地上では息をひそめるように暮らしている。
　そうだろう！パプニカ王国の者たちよ！！
　覚えがないとは言わせんぞ！！」
　急に刃が向けられ、マリンもエイミも身を震わせた。アポロも息を呑み、目を見張った。
　彼らは、魔王軍の侵攻にさらされてきた被害者だ。城を落とされ、家を焼かれ、多くの同胞を失ってきた。そこに、突然、お前たちも、加害者なのだと、冷水を浴びせられたのだ。それも、攻め手の大将に。
　こんな理不尽な話はないはずだ。
　だが、確信を持って主張をする不死騎団長を前に、彼らは身を潜めていた岩陰から出ることができず、凍りついた。
　その中で、レオナは、無言で足を進めた。安全な隠れ家から、ひとり、表に出ようとしていた。

アポロは、レオナを引き留めた。
「姫。」
レオナは振り返った。そして、毅然とした瞳で、アポロに告げた。
「私は、彼の話を聞かなければならないわ。受け入れることができないことばでも、まずは聞かなければ。
意見を戦わせるのは、それからよ。」
それは、王者の眼差しだった。
若き「女王」の肩の上で、金の翼をもつスライムは、無言で彼女に寄り添っていた。

ヒュンケルは、岩陰に隠れている人間たちの気配を感じ取っていた。そして、大きな動きがないと早計に判断し、諦めにも似た、ため息を吐いた。
「何も言えないか。
所詮、人間とモンスターは同じ地には住めないのだ。
ならば、モンスターたちが地上で生きていくには、人間どもに出て行ってもらわなければならん。
俺が戦うのはそのためだ。」
ポップは、ヒュンケルの言葉がうまく理解できなかった。いや、彼だけではない。この場にいる殆どの者が、その語る意味を理解できなかっただろう。
人間であるはずのヒュンケルが、同胞であるはずの人々を排除する言葉を語る。そして、それは異種族のためであるという。
「何言ってんだよ・・・てめえだって、人間だろうが！」
ポップは叫んだ。
だが、ヒュンケルは、厳しい眼差しを彼に返した。
「俺を育ててくれたのは地底魔城のモンスターたちだ。俺自身の種族が人間であろうが関係ない。人間が、俺に、俺たちに、何をしてくれたというのだ。」
響き渡るヒュンケルの声に、ポップも、アポロたちも、絶望的な断絶を感じていた。
ヒュンケルのことばが全く理解できなかった。耳には入るのに、

うまく咀嚼できない。突如、前提の違う立場からの主張に、彼らは戸惑っていた。
　誰も何も言葉を継げずにいた中で、静かに、ヒュンケルの名を呼ぶ声が響いた。
「ヒュンケル。」
　ダイは、穏やかな声色でヒュンケルを呼んだ。この中では、一番幼いはずのダイだけは、動揺はなく、落ち着いた態度を崩していなかった。
「やっぱり・・・誰かのためだったんだね。」
　その声は、場違いなくらいひどく穏やかで、どこか嬉しげな色さえも帯びていたように感じられた。
　だが、ダイは、すぐに眉尻を下げ、哀しみをその幼い面に浮かべながら、語り始めた。それは、同じ生い立ちを持つ者同士に通じ合う、苦しさであった。
「おれ、ヒュンケルの気持ち、ちょっとだけわかるよ。おれも、デルムリン島のみんなに育ててもらったから・・・みんなに何かあったら、おれだって、人間と戦おうって思っちゃうかもしれない。」
　ダイは、言葉を区切った。その声色は変わり、幾分か明るい口調になっていた。
「でもさ、人間にだって、悪い人もいるかもしれないけど、いい人だっている。モンスターに親切にしてくれた人だっていた。
　アバン先生は、デルムリン島のみんなを守ってくれた。
　マァムだって、ネイル村の人たちも、ゴメちゃんに優しくしてくれたもんね。」
　ダイは、人懐っこい笑みを浮かべ、マァムに微笑みかけた。マァムは、ダイと初めて出会ったときを思い出し、暖かな気持ちが蘇ってきた。
「ダイ・・・。」
　ダイは、マァムと笑みを交わすと、だがすぐに表情を引き締めた。厳しい眼差しが、ヒュンケルに注がれる。
「それに、誰かを守るために、誰かを傷つけるって、おかしいんじゃないか。
　モンスターたちの生きる場所が欲しいって、それはおれもそうし

たい。モンスターが人間に迫害されるのだって、おれは嫌だし、その逆もあってほしくない。
　だから。」
　ダイは声を上げた。
「だから、モンスターたちの生きる場所を得るために、武力で解決しようっていうのは、絶対に間違っている！」
　真っ直ぐな、鮮烈なまでに純粋なダイの叫びが、大地に響いた。
「おれは、モンスターたちも守りたいって思っている。おれは、人間のためだけに戦っているんじゃない。
　ヒュンケル、力を貸してよ。
　おれは、みんなが平和に安心して暮らしていけるようになってほしいんだ。
　そのために、魔王軍がいま、人間社会に侵攻しているのを何とか食い止めたい。
　これは、人間のためだけじゃない。
　モンスターたちだって、大魔王にいいように使われていいわけないんだ。」
　ダイの言葉は、見えない刃のように、ヒュンケルの奥深いところに刺さっていた。
　幼いヒュンケルを慈しんでくれた父を始めとした地底魔城のモンスターたち。彼らの笑顔が蘇る。
　だが、その感傷を覆い隠し、ヒュンケルは睨むようにダイを見据えた。
「・・・お前を信じろというのか？」
　その問いの答えは、意外すぎるものだった。ダイは笑顔で応えた。
「おれじゃなくて、クロコダインを信じてよ。」
「クロコダイン・・・？」
「クロコダインも、おれと一緒に戦ってくれるって言ってくれたんだ。
　そう言ってくれた、クロコダインを信じてほしいんだ。」
　ヒュンケルがクロコダインに視線を移すと、かつての同僚は、にやりと明るい笑みを浮かべていた。

ダイは、言葉を足した。
「それに、これは、レオナも承知してる。
　だよね、レオナ？」
　いつの間にか、ダイのすぐ後ろに佇んでいたレオナを振り返り、ダイはそう尋ねた。その言葉に、レオナは笑みを浮かべた。王女の肩には、金のスライムがとまり、羽根を上に上げていた。
「・・・王女が・・・。」
　ヒュンケルが呟く中、クロコダインは、ヒュンケルに歩み寄った。
「ヒュンケル、もういいだろう。意地を張るな。お前はダイに必要な男だ。ダイもお前と同じ背景を持つのだからな。」
　ヒュンケルは、少しばつが悪そうにかつての同僚に尋ねた。
「いいのか。
　クロコダイン・・・お前、俺を軽蔑していただろう？」
「すまん、誤解だったようだな。」
　クロコダインは、からりとした笑いとともに応えた。
　ヒュンケルは、訝しげに尋ねた。
「何故そう思う。」
「マァムを見ていればわかる。
　マァムは、お前を信頼している。お前がマァムに酷い扱いをしていないことは、すぐに分かった。
　お前たちの間に何があったかは、聞かないがな。」
　そう言って、クロコダインはにやりとした笑みを浮かべた。とたんに、マァムは頬を染めた。それに気づき、クロコダインも豪快に笑う。
　ダイはレオナに視線を向けた。
「レオナ、おれがレオナにお願いしたいことは、これだよ。
　おれは、ヒュンケルの力を借りたい。
　今までのこと、全部わかっているけど、おれはそうしたいんだ。」
　レオナは、ダイを見つめ、そして、ヒュンケルに視線を移した。気高い眼差しは、王族としての責任を背負ってのものだった。
　こうして、間近で視線を交わすのは、レオナにとっても、ヒュン

ケルにとっても初めてのことだった。
　ヒュンケルは、ごくりと息を飲んだ。レオナにとって、ヒュンケルはパプニカ王都を攻め落とした張本人、父王の仇だ。
　恨みをぶつけられるのが、むしろ当然のはずだった。
　だが、レオナは、ヒュンケルから視線を外さなかった。
　しばし沈黙したまま、ヒュンケルを見据え、そして、やがて、レオナは、黙ってうなずいた。
　そのわずかな動作に、ヒュンケルは感嘆の声を漏らした。
　まだ幼いはずの少年少女たちが、新たな世界を切り開こうとしている。その地平の先端に自らがあることをヒュンケルは感じた。
　そこから見える景色は、彼がこれまで見てきたどの世界よりも、広く遠く、遥か彼方まで広がっていた。
　ヒュンケルは、ため息を吐くように呟いた。
「・・・俺の負けだな。」
　そして、彼は天を仰いだ。
　いつの前にか、ラナリオンの雨雲は去り、ヒュンケルの視界には、抜けるような青空が広がっていた。
　その空の向こうに、落城前の地底魔城での思い出が浮かぶ。
　父の優しい手の感触。
　幼い彼を抱き上げてくれたオークのふわふわの体毛。
　ギガンテスの肩車。
　取り戻したかった時の思い出が、憎しみと意地に凝り固まっていた頑なな心とともに溶けていった。
　ヒュンケルは、目を閉じた。
　そして、大きく息を吐いた。
　瞼の裏の思い出は、いつだって温かかった。
　ヒュンケルは、自らの生きる大地に視線を戻した。そして、毅然とした将の面持ちで、大きく声を上げ、幼い王女に呼びかけた。
「パプニカ王女、レオナ姫！
　不死騎団長ヒュンケル、パプニカ軍に投降する！
　不死騎団は全軍、パプニカ軍への攻撃を停止し、侵攻地域から撤退する。団員たちへの手出しは無用だ。
　その代わり、俺の身柄を貴方に預けよう。」

歓声が上がった。
　パプニカ解放の瞬間だった。
　アポロは、安心しきった顔で、力が抜けたように膝をついた。
　マリンは涙ぐみ、エイミは、マリンに笑みを向けた。
　バダックは、目に涙を浮かべながら、零れ落ちないように上を向いた。老騎士は、いまはもういない亡き主君に向かって呟いた。
「陛下・・・姫はご立派な、女王、ですぞ・・・。」
　これまで隠れてダイとヒュンケルの戦いを見守っていたパプニカ軍の兵士たちは、あちこちから顔を出し、互いに手を叩きあって、長く続いた戦いの終わりを歓迎していた。
　その中で、モルグは、深く、ヒュンケルに頭を下げていた。その目には、涙が滲んでいた。
　マァムは、そっと傷付いたままのヒュンケルに歩み寄った。
「ヒュンケル。」
　ヒュンケルもまた、マァムを顧みた。
　マァムは、泣き笑いのような笑顔をヒュンケルに向けると、彼に告げた。
「ヒュンケル、貴方に渡したいものがあるの。」
　そう言って、マァムは、両手でヒュンケルの右手をとった。
　マァムは、ヒュンケルの右手を両手で包み込んだ。ふと、ヒュンケルは、掌に、冷たく固い小さな感触を覚えた。
　マァムは、ヒュンケルの両手を包み込みながら、彼に尋ねた。
「ずっと、ずっと、貴方に返したいと思っていた。受け取ってくれる？」
　そして、マァムはそっと、手を放した。
　マァムの温かさが去った右手には、小さな輝石が乗せられていた。
　ヒュンケルは目を見張った。
　見間違えるはずはない。
　石の美しさも、ほんの少しついた傷も、少し錆びかけたチェーンも、何もかもになじみがある。
　彼が十年以上もの間、肌身離さず持っていた涙型の輝石は、以前と変らない曇りのない面で、彼を見つめていた。

ヒュンケルは呟いた。
「これは、俺の・・・。
　ずっと持っていたのか？」
　マァムは、ゆっくりとうなずいた。
「ええ。」
　彼自身が捨てたはずの師との思い出は、再びヒュンケルの手の中にあった。そして、マァムの胸元にも輝く同じ輝石が、私たちは仲間なのだと語り掛けてきていた。
　ヒュンケルは、卒業のあかしを強く握りしめた。
　右手の中からふわりと温かな波動が伝わってくる。
　毎夜感じていたマァムの温かな波動とともに、それよりも少し遊び心のある慈しみ深い波動が流れ込んできた。その気配の向こうに、若かった師の後姿が見えた気がした。
　ヒュンケルは思った。
　この石は、これほど暖かかっただろうか、と。
　だが、すぐにヒュンケルは思いなおした。
　彼が気付かなかっただけで、愛はいつだって身近にあったのだ。
　ヒュンケルは、卒業のあかしを握りしめたまま、マァムに礼を述べた。その声は震えていた。
「ありがとう、マァム・・・。」
　マァムは黙って、首を横に振った。
　ヒュンケルを見つめるその琥珀色の瞳には、涙が浮かんでいた。